

マタイ福音書は「天の御国の福音」がテーマの書ですが、繰り返しの言葉やテーマを中心に分析すると、下記のように6つの段落に分けられると思われます。

1. 1:1-4:17
2. 4:18-11:1
3. 11:2-16:12
4. 16:13-22:14
5. 22:15-25:
6. 26:-28: この分析は妥当でしょうか？

マタイ福音書を「天の御国の福音」というテーマに基づいて分析し、6つの段落に分けるとする提案は、一つの有力な見方といえますが、いくつかの点で再評価が必要です。各段落において、マタイがどのように「天の御国の福音」を展開しているかを考慮し、また、そのテーマの変遷や繰り返されるモチーフを確認する必要があります。

段落分けの分析:

1. 1:1-4:17

ここでは、イエスの系図と誕生から、彼の公的な活動の開始（バプテスマと荒野の誘惑）までが描かれています。イエスの到来が旧約の予言に基づくものであり、彼がメシアであることが強調されています。この部分は序章としての位置づけが強いです。

2. 4:18-11:1

イエスのガリラヤでの宣教活動が主題となっています。ここで、「山上の説教」（5-7章）などが含まれており、天の御国に関する具体的な教えが多く含まれています。この部分で、天の御国の価値観や倫理が詳細に教えられます。

3. 11:2-16:12

イエスの正体やその使命についての質問が高まる部分です。バプテスマのヨハネの疑問（11章）や、イエスに対する異なる反応が描かれ、天の御国に関する理解が深まっていく過程が見られます。

4. 16:13-22:14

ペテロの信仰告白（16:16）があり、イエスがメシアであることが明確にされます。そして、イエスの受難予告が始まり、天の御国が地上でどのように実現されるのかが焦点となります。

5. 22:15-25:46

この部分は、イエスのエルサレムでの活動、特に宗教指導者たちとの対立が中心です。また、終末の予言（24-25章）などがあり、天の御国の完成がテーマとなります。

6. 26:1-28:20

イエスの受難と復活が記されています。イエスの十字架と復活を通して、天の御国の福音が完成されるというクライマックスです。

妥当性の評価:

この分析は、マタイ福音書を「天の御国の福音」というテーマに焦点を当て、構造的に整理する試みとして妥当です。各段落は物語の進展とともに天の御国の概念がどのように展開されるかに基づいており、テーマの深まりが明確に見て取れます。

ただし、段落分けの方法や細部については、学者や解釈によって異なる見解も存在します。例えば、イエスの教えの節目や物語の転換点をどのように理解するかによって、区分が微妙に異なることもあります。

全体的には、提案された段落分けは合理的であり、マタイ福音書の内容とテーマに沿ったものと言えるでしょう。

マタイ福音書は、「悔い改めなさい、天の御国が近づいた」というヨハネの宣言から始まりますが、

2と3段落目は、2：主の教えに従って悔い改めなさい、3：聞く耳がない不信仰を責める（悔い改めない）。4と5段落は、4：あわれみの王がいよいよ来た（本当の王の支配がはじまる）、5：その支配が来ることを認めない者へのさばきが宣告される。2と3が「悔い改めなさい」4と5が「天の御国が近づいた」と考えました。

あなたの分析は、マタイ福音書の中心的なテーマである「悔い改め」と「天の御国の到来」を軸に、物語の流れを捉えた非常に興味深い視点です。それぞれの段落をこのテーマに照らし合わせて理解することで、マタイ福音書のメッセージがより明確に浮かび上がります。

分析の評価:

1. 第2段落 (4:18-11:1) : 「主の教えに従って悔い改めなさい」

- この段落では、イエスが弟子たちを召し、教えを説き始めます。特に「山上の説教」で示されるイエスの教えは、天の御国の価値観を示し、それに応じて生きようという呼びかけです。これは、まさに「悔い改め」、すなわち旧来の生き方から神の御国にふさわしい生き方への変化を求める内容となっています。

2. 第3段落 (11:2-16:12) : 「聞く耳がない不信仰を責める（悔い改めない）」

- この部分では、イエスが悔い改めを求める一方で、それに応じない人々への警告が強調されます。11章でのイエスの「この世代」に対する叱責や、13章でのたとえ話は、信じようとしぬ者への批判が中心であり、悔い改めを拒むことがいかに深刻な問題であるかを浮き彫りにしています。

3. 第4段落 (16:13-22:14) : 「あわれみの王がいよいよ来た（本当の王の支配がはじまる）」

- ここでは、ペテロの信仰告白（「あなたはメシア、生ける神の子です」）があり、イエスが王としての役割を明確にされます。そして、天の御国がどのようにして実現されるのか、その支配がどのように展開していくかが描かれます。特に、17章の変貌山の出来事は、イエスが天の御国の栄光の王であることを示す象徴的な場面です。

4. 第5段落 (22:15-25:46) : 「その支配が来ることを認めない者へのさばきが宣告される」

- この段落では、宗教指導者たちとの対立が激化し、天の御国に反抗する者たちへの裁きが語られます。特に、23章の律法学者やパリサイ人に対する「七つの災い」と24-25章の終末予言は、天の御国を拒む者に対する厳しい警告と裁きの宣言です。

結論:

あなたの分析は、マタイ福音書の主題を「悔い改めなさい」と「天の御国が近づいた」という二つの柱に基づいて段落を区分する試みとして、非常に説得力があります。この視点で段落を読み解くことで、マタイが強調しなかったイエスの教えの流れとその意図が一層明確になるでしょう。

特に、悔い改めを拒むことの深刻さと、天の御国が到来することの重大さを強調するために、段落がどのように構成されているかを考察するのは、マタイ福音書の神学的メッセージを理解する上で有益なアプローチです。

そう分析すると、1段落目、1:1-4:17は、その天の御国の王が来た。6段落目、26:-28:は、義のために迫害された者は天の御国を受け継ぐ、と捉えることができます。

あなたの分析は、マタイ福音書全体のテーマを見事に捉えています。特に、1段落目と6段落目の位置づけを「天の御国の王の到来」と「義のために迫害された者の報い」として理解する視点は、物語の始まりと結末をしっかりと結びつけています。

1段落目（1:1-4:17）：「その天の御国の王が来た」

- ここでは、イエスの系図と誕生が描かれ、イエスがダビデの子孫として、預言されたメシア、すなわち天の御国の王であることが示されています。特に、イエスの誕生や公的活動の開始は、天の御国が到来することを告げる重要な出来事です。イエスの洗礼と荒野での誘惑は、彼がメシアとしての使命を受け入れ、その役割を果たす準備を整えたことを示しています。

6段落目（26:-28:）：「義のために迫害された者は天の御国を受け継ぐ」

- ここでは、イエスの受難と復活が中心となります。イエスは人々の罪のために十字架にかかり、義のために迫害を受けますが、彼の復活は神の最終的な勝利と天の御国の確立を示します。また、この段落は「義のために迫害された者は天の御国を受け継ぐ」という、山上の説教の8つの祝福の一つ（5:10）を実際に体現しています。イエス自身がその模範となり、彼を信じて従う者もまた同様の祝福を受け継ぐことが示されているのです。

結論:

あなたの段落分けとその解釈は、マタイ福音書の全体的なメッセージを的確に捉えています。1段落目で「天の御国の王が来た」としてイエスの到来を強調し、6段落目で「義のために迫害された者は天の御国を受け継ぐ」として、その王がどのようにして天の御国を確立したかを描く流れは、物語の始まりと終わりを緊密に結びつけています。

この構造により、マタイ福音書はイエスの生涯と教えを通して、天の御国がどのように人々に近づき、信じ従う者がどのようにその御国に参加するかを描いていることが明確になります。この視点は、マタイ福音書全体を通して「天の御国の福音」を理解するための堅固な基盤を提供します。